

豊島教会堅信式説教

2017年11月26日、王であるキリスト

[\[聖書朗読箇所\]](#)

説教

今日は、「王であるキリスト」の祭日として、ミサの中で堅信式が行われます。

主イエス・キリストは、その人類の歴史の最後の日、王として、わたしたちに対して最後の審判を行う、という教えが、今日語られています。

わたしたちは、それぞれ、自分の生涯の行いについて、王であるキリストから、裁きを受けなければなりません。その裁きの基準というのは何であるかと言いますと、4度も繰り返し言われていますが、「困っている人を助けたかどうか」ということが、裁きの基準になっています。

「飢えている人に食べものを与える」、「渴いている人に飲みものを与える」、「着るものがない人に衣服を与える」、「病者を訪問する」、「寝るところがない人に宿をお貸しする」、「牢(ろう)につながれている人を訪問する」。この6つの善い行いをしたかどうかということが、最後の審判のときの裁きの基準になります。

一年前の王であるキリストの祭日は11月20日であり、その日は、「いつくしみの特別聖年」が終了する日でした。

フランシスコ教皇様は、いつくしみの特別聖年という特別な期間を設けられて、「わたしたちの神様は、いつくしみ深いかたですから、「たしたちも、主イエス・キリストに倣い、いつくしみ深い者でありなさい」とお教えになりました。そして、「いつくしみ深い行いとは何であるか」ということを、具体的にお話しになりました。

そのいつくしみのみわざには、7カ条ありました。もっとも、正確に言うと、14カ条になりますが、14をふたつに分けて7つずつ、身体で行う善いわざ、精神で行う善いわざとに分けました。身体で行う善いわざは、いま申し上げた6カ条と、7つ目に「死者を埋葬する」ことが加えられています。

そして、精神的ないつくしみのわざは、次の7カ条です。

「疑いを抱いている人に助言すること。」

「無知な人に教えること。」

「罪人を戒めること。」

「悲しんでいる人を慰めること。」

「人から侮辱されたときにゆるすこと。」

「煩わしい人を忍耐強く耐え忍ぶこと。」

「生者と死者のために祈ること。」 このようになっています。

「この14カ条を実行してください」と教皇様が言われたのです。

神様が、わたしたちにお望みになっていること、それは、いつくしみ深い者であるということです。そして、いつくしみ深い者であるかどうかということは、人間、心と体から成り立っているものでして、心と体は、はっきりと分けることができませんが、「心と体の両方を使って、毎日、いつくしみ深い者であるように努めなさい」という教えです。

最後の日、人類の歴史で言えば、主イエス・キリストの再臨の日、個人の歴史で言えば、人生の最後のとき、死ぬとき、わたしたちは審判を受けなければならない。「どれだけ、神様のいつくしみを実行したか」ということが、基準になります。そして、「飢えている人に食物を与えるということは、主イエス・キリストにして差し上げることと同じですよ」と言われました。少し考えてみますと、どうしてそうなのかという気がしないわけでもありませんが、はっきりとそのように言っておられます。

神様自身は、飢えたり、渴いたりすることはありません。着るものがないから困るということはない。しかし、わたしたち人間は、世界中の現実を見れば、多くの人が、毎日、食べるものをきちんと与えられていない。着るものもない。今夜、寝るところもない。

そのような方がたくさんいらっしゃる。そのような人のためにするということは、主イエス・キリストにして差し上げることと同じですよ、と言われた。実に、胸に迫るようなお言葉です。

さて、わたくしは、2000年9月3日に、東京大司教に就任いたしました。そして、間もなく、12月16日に、次の大司教さんと交代いたします。

就任したときに、決意表明を行いました。それは、どのようなことであったかと申しますと、この東京教区という信者の共同体は、人々に開かれた、温かい、潤いのある、そのような教会になりたい。困っている人、苦しんでいる人、悩んでいる人、迷っている人、傷ついている人、落ち込んでいる人、人生の意味に戸惑っている人、寂しい人などが、自分の場所を見いだす、ほっとする、安らぎを与えられる、慰め、喜びを見いだす、そのような教会、そのような人々の交わりとなるように努めたいという内容です。

もちろん、既にそうになっているから、みなさんは信者になった。しかし、多くの人

は、心の飢えを持っています。そのような人々に応える、そのような教会になりたい。そのために、わたしたち自身の間で、お互いに受け入れ合い、愛し合い、助け合う、そのような交わりが出来ていなければならない。もちろん、出来ていますが、非常に足りないと思う。

あのような人々のようになりたい。あちらに行けば、わたしは何か助けられる。そのように思っただけのような教会になりたい。そのために、力を尽くしますから、みなさまも、どうぞ、助けてください。神様、この願いを実行できるように、わたしに力をお与えください。そのような祈りを献げました。

教皇様に辞任をお願いして、許可されましたので、わたしは東京教区の仕事から離れます。

この5年間、隣のさいたま教区の責任者も兼務していますので、両方は大変だろうから、より負担の重いところは終わってもよいが、あなたは残った方を、しっかりしなさい、ということだろうと思っています。

それから、東京教区に所属する引退司祭、名誉司教であることには変わりありませんので、みなさまとまったく関係のない存在になるわけではありません。

われわれは、すべて、いつか神様の前に出て、裁きを受けなければならない。お前はよくやったと言っただけのような、自分でありたい。

大変微力であり、罪深い者であります。それでも、神様のいつくしみに信頼し、少しでも神様のいつくしみを実行する者として、歩んで行きたいし、皆さまも、そうしていただきたいと、心から願っています。

日本の教会は、400年、500年と長い歴史を持っています。なかなか、わたしたちの信仰が、人々に伝わっていかない。他方、自分がキリスト信者であると自覚していない人であっても、主イエスが教えているような善いこと、困っている人を助けるということ、多くの人々が実行しています。教会に来ない人の方が、かえって、よくそのようなことをしているかもしれない。人間の価値はどこにあるのかというと、どれだけ、神のいつくしみを実行したかどうかというところにあります。

ですから、わたしたちは、もっと心して、神のいつくしみを実行する者となりますよう、聖霊の助けを願いましょう。

今日、堅信を受けられるみなさん、堅信を受けるということは、主イエス・キリストの教えを実行する者となるということです。

イエス・キリストという名前を使わなくても、イエス・キリストがおっしゃっているいつくしみのわざを、どうか、日々実行するように心掛けていただきたいと思えます。

聖書朗読箇所

第一朗読 エゼキエル34:11-12、15-17

第二朗読 一コリント5:20-26、28

福音朗読 マタイによる福音書 25:31-46

(福音本文)

〔そのとき、イエスは弟子たちに言われた。〕「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、羊を右に、山羊を左に置く。そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気の見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物差し上げ、のどが渴いておられるのを見て飲み物差し上げたのでしょうか。いつ、旅しておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたのでしょうか。いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたのでしょうか。』

そこで、王は答える。『はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』

それから、王は左側にいる人たちにも言う。『呪われた者ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせず、のどが渴いたときに飲ませず、旅をしていたときに宿を貸さず、裸のときに着せず、病気の時、牢にいたときに、訪ねてくれなかったからだ。』

すると、彼らも答える。『主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えたり、渴いたり、旅をしたり、裸であったり、病気であったり、牢におられたりするのを見て、お世話をしなかったのでしょうか。』そこで、王は答える。『はっきり言っておく。この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである。』こうして、この者どもは永遠の罰を受け、正しい人たちは永遠の命にあずかるのである。」

[説教へ戻る](#)